

# 心女新聞

編集・発行 飯島可琳

われるまでに禅が日本に定着したのはなぜだろうか。

日本にある禅を説く宗派は、

「禅」はしばしば日本人のたしなみを象徴する言葉として用いられている。外国人宿泊客の多いあるホテルは、基本的な西洋のスタイルの中に和風のモチーフを取り入れた客室を「エグゼクティブハウス

禅」と名付けている。「禅」は日本独特の情緒」という認識は私の中にもうつすらとあつた。坐禅を組み、自分を見つめる作法にある静けさは、いわゆる日本らしさにしつくりとくもとインドから中国を経て、日本へと伝えられたものだそ

うだ。「Japanese ZEN」と言

曹洞宗、臨済宗、黄檗宗と大きく分けて三つある。禅宗と総称されることもあるが、実際には禅宗という宗派は存在しないらしい。禅は中国から伝えられたと先述したが、実

は黄檗宗という宗派自体は日本特有のものである。黄檗宗宗祖の隱元禪師は、もともとは臨済宗の僧であり、伝えたのも臨済宗の教えであった。しかし、江戸時代に隱元禪師が日本に渡来したのは、日本に臨済宗と曹洞宗が伝えられ広まつた後だつたため、既存の臨済宗とは区別されたのだ。

本号で紹介するのは、宇治

にある黄檗宗大本山の萬福寺である。黄檗宗王龍寺の副住職、飯野さんに境内を案内していただく機会に恵まれた。

中国様式は境内全体で一匹の龍を表していることにも見られる。出入口にあたる総門あたりは龍の喉で、龍の目を模した二つの井戸がある。アーガイル柄のように境内に並べ

職、飯野さんに境内を案内し



山門を出れば日本ぞ

茶摘うた

黄檗宗寺院の特徴は、中国の様式を随所に取り入れていることにある。この句には、中国にいるように錯覚してしまう境内と、茶畠から茶摘み唄が聞こえる日本らしい境外との対比が表現されている。現在は宅地開発が進み、茶摘み唄が聞こえてくることはない。しかし、境内の中国らしいさは今に残る。

黄檗宗寺院の特徴は、日本特有のものである。黄檗宗宗祖の隱元禪師は、もともとは臨済宗の僧であり、伝えたのも臨済宗の教えであった。しかし、江戸時代に隱元禪師が日本に渡来したのは、日本に臨済宗と曹洞宗が伝えられ広まつた後だつたため、既存の臨済宗とは区別されたのだ。

本号で紹介するのは、宇治



禅宗は釈迦如来を本尊とする宗派のため、萬福寺の本堂にあたる「大雄寶殿」の本尊はもちろん釈迦如来だ。堂内の壁面に沿う壇上には、釈迦如來の弟子たち十八羅漢の像も安置されている。その内の

一体、跋陀羅尊者像の尊前にのみ、ガラスケースがある。

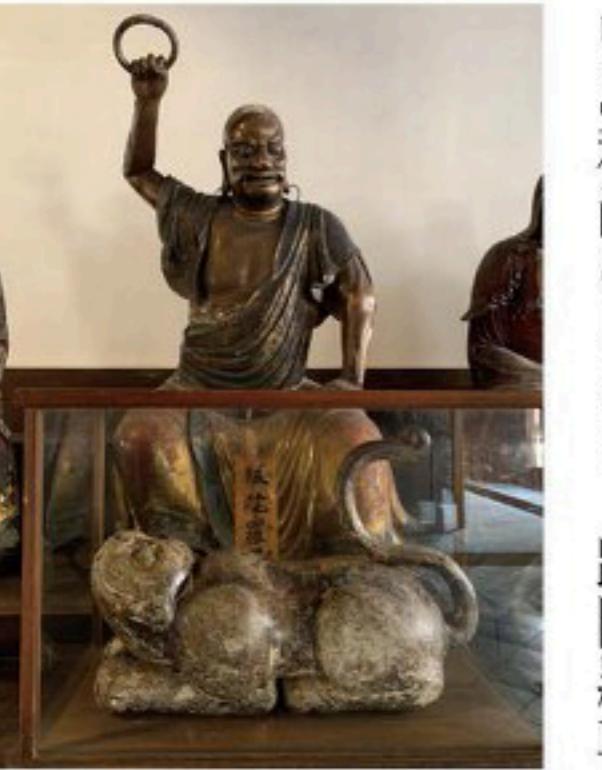
中の動物は、腹ばいで尾を高く上げ、跋陀羅尊者を慕うよい姿からは想像もつかないが、この動物は人食い虎である。中島和尚によると、跋陀羅尊者は唇を堅く結び、頬を膨らませていて、神通力は德の高い

人でも気張らなければならぬほど高度な技なのだろう。



どうしても形のあるものに目が行きがちだが、萬福寺のしきたりも独特だ。中でも強く印象に残っているのが追い出しである。追い出しは、入門するため訪れた見習い僧を先輩修行僧がお寺から追い出しだ。禅寺では当たり前に行われていると聞いて驚いたが、さらに驚いたのがその追い出しかただ。先輩修行僧が、坐禅で用いる警策といふ棒を振りかざし、「出て行け！」と大声で何度も叫びながら、見習い僧の後を追う。

偶然その場に居合わせた私は、見てはいけないもめ事の現場に遭遇してしまつたような後ろめたさを覚えた。心根を試すために行つてゐる作法なので、繰り返せば待遇が良くな



り、やがて修行僧として認め



写真は許可をいただいて撮影・掲載しています。また、本文イラストは、筆者のイメージに基づき描いたものです。取材にご協力いた

だきました。